

みんなちがってみんないい

R2その(5) 指導教諭 木村 栄

今回はその他の障がいや気になる特性についてお話しします。

昨年同様、「知的障害」から話を始めます。

日本では知的障害の判断基準を、知能検査を用いて考えます。知能検査は数種類あり、それぞれで知りたい項目が違うので、導き出された検査結果を同列で判断することはできません。

一般的にIQ=100を標準とし、そこから高くなれば高知能、低くなれば低知能ということになります。通常、知的な遅れがあると判断されるのはIQが70以下であることがほとんどで、85~70までの間をグレーゾーンまたは境界域と呼ぶことがあります。

グレーゾーンのお子さんを含め、知的に遅れがあると学習や技能の習得に時間が掛かったり、習得自体が困難になったりします。通常、学年が上がるにつれて学習理解が困難になります。そのため、未修得の学習内容が増えていき、勉強に対しての意欲や根気が続かなくなり、学力不振に陥ることが少なくありません。このような場合、高学年ではテストの結果が50点以下になる状況がよく見られます。結果として中学でも学習理解が進まず、進学や進路が厳しくなる例が少なくありません。できる限り早期から支援について相談していくことが大切です。

次は「愛着障害」です。これは幼児期に親との適切な愛着形成ができていなかったために、発達上の影響を受けて引き起こされる精神疾患です。

主に2つのタイプがあり、適切な対人関係が構築できず対人トラブルを起こしたり、警戒心が強いために、相手に対して暴力的な対応をとったりするタイプと、反対に誰に対しても警戒心がなく、無分別な社交性を見せる特性のため、犯罪などに巻き込まれやすいタイプに分けられます。

近年、「愛着障害」の人が見せる特徴が、ADHDなどの発達障害の人と似ているため、間違っ

て理解されていることが少なくありません。正しい判断には病院を受診することが大切です。

続いて「選択性緘黙(かんもく)」です。「場面緘黙」とも言われます。これは、家族や知合いなどの前ではよく喋り、まったく問題は無いのに、学校内や知らない人の前では、まったく喋らなくなったり、小さな声しか出せなく

なったりする障がいです。学校教育法では、自閉スペクトラム症やADHDなどと同じ「情緒障害」に分類されています。成長とともに消失したり、進学や転居など環境が変わると同時に話せるようになったりすることもあります。稀ですが、行動療法や環境調整など、細かい支援が必要になりますが、長期的な相談や福祉の支援が必要になる場合があるので、早い時期に病院を受診し、相談しておくことが大切です。「家で話せているんだから、いつか外でも話せるようになるだろう」と軽く考えられがちですが、実際は「引きこもり」などに発展する場合も少なくありません。選択性緘黙の場合、一番困るのは就労です。社会に対応する対人スキルが十分ではないため、職業の選択が限られてくる場合があります。「かんもくネット」や「かんもくの会」など、当事者や家族のためのHPもありますので、気になる方は一度調べてみることをお勧めします。

最後は「感覚調整障害」です。「視覚」「嗅覚」「味覚」「聴覚」「触覚」など、人が生活する上で必要な感覚に「過敏さ」「鈍麻さ」があるために、生活上様々な不都合が起こります。「触覚」の違和感のために洋服の繊維にこだわりがあったり、「聴覚」が過敏すぎるため、授業中の様々な音が気になって学習に集中できなかったりすることがあります。その他にも「味覚」に過敏さがあると好き嫌いが激しくなり、給食などで辛い思いをしますし、「嗅覚」が過敏だと様々な臭いが辛くなります。

先日、テレビ番組でシンガーソングライターの広瀬香美さんが、「絶対音感のために日常生活のあらゆる音が音階で聞こえ、その不協和音(不快に濁って聞こえる2つ以上の音)に苦しめられている」とお話されていました。「絶対音感がある」と聞くと羨ましく思いがちですが、決して良いことだけではないことが分かるエピソードでした。これは「聴覚過敏」とは少し違いますが、人間の感覚器から得られる情報は、「ちよど良い」状態で初めて問題なく機能します。

お子様の感覚のことで気になることがあれば、いつでもご相談ください。

今回は「発達性協調運動症」についてお話し

て、今まで教員を続けようと思つてきた子どもたちも、支援者の手助けがなければ、今更には、困ることも多いので、適切な支援をお願いします。また、発達性協調運動症の子供は、運動の苦手な子供が多く、学習の遅れや、コミュニケーションの障害など、様々な問題を抱えています。そのため、適切な支援が必要です。発達性協調運動症の子供は、運動の苦手な子供が多く、学習の遅れや、コミュニケーションの障害など、様々な問題を抱えています。そのため、適切な支援が必要です。発達性協調運動症の子供は、運動の苦手な子供が多く、学習の遅れや、コミュニケーションの障害など、様々な問題を抱えています。そのため、適切な支援が必要です。